

平成三十年三月一日発行 第二十八卷第三号 通巻第三二二号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

# 槐 かい

平成30年3月号

岡井省二創刊



# 回転ドア

高橋将夫

初旅は古事記の中を行くもよし

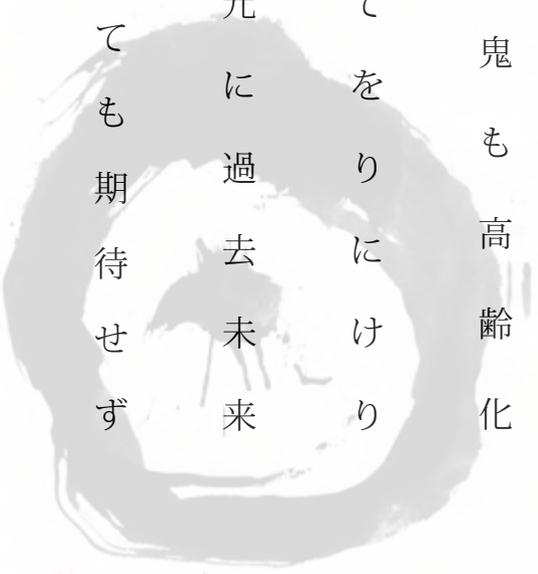
宇宙より返る餅や初山河

宇宙船に浮かんでゐたる鏡餅

「俳句界」一月号より八句

空は父大地は母よ初雀

綱引の綱の中央耐へてをり  
宝船モデルチェンジをしたやうな  
お正月地獄の鬼も高齢化  
鏡餅雲を夢みてをりにけり  
双六や同じ次元に過去未来  
元旦や希望はしても期待せず  
去年今年回転ドアで入れ替はる



# 槐安集

水野恒彦

日月を虚実に生きて落霜紅  
天涯よりとどく海鳴り勇魚取  
神々の遊戯の終りの焚火跡  
家中の鏡の曇る雪女郎  
光年の時空の果の冬銀河

加藤みき

鉄鉢に斜めの日ざし寒施行  
寒晴れや遺言はしかと守るべし  
初参り溝川ぽんととび越ゆる  
朴落葉吾が動けばガサガサと  
北国や花花はみな一斉に



中島陽華

踏めば鳴る楡の落葉よハレルーヤ  
お手玉になりきつてをり木の葉髪  
枯露柿や天の前禪揺れもせで  
湯気にかすむ護符や絵札や大根焚  
神在の安全ピンが五六本

竹内悦子

目が見えて耳が聞こえて枇杷の花  
生と死は賜るものよ花八手  
日も月も東より出づ石露の花  
今沈む冬満月のあかあかと  
仙厓の曆届くや時計鳴る

雨村敏子

大年の松の間を日の通る  
狸々木赤の真下の深き闇  
霜月のひかりの粒や豆を干す  
寒雷やパスタに芯のありにける  
母たちの臀たのもし八頭

本多俊子

来る年や少し濃くなる生命線  
その芯に命しつかと枯木立  
冬銀河まつすぐ届く師の一語  
冬の鷺血のいろみせて消えにけり  
生死にも耐へる気力寒夕焼

近藤喜子

竹人形の遠き目差し雪の声  
水に沈む氷もあらん大宇宙  
寒菊や篠笛を吹く糸の息  
方舟や標としたる寒昂  
白ふくろふ百年先を見てをりぬ

瀬川公馨

寒月の絶対絶美なりしなり  
冬入日年貢納める処なし  
寒林に出で入りしてや何のこゑ  
干柿の日に日に離人症候群  
歳の市獄の飯の匂ひかな

久保東海司

熊川暁子

雪催舟屋に戻る櫂の音  
嘴あげて鶴いつせいに声揃へ  
鹿寄せの法螺の息継ぐ息白し  
鳩浮かぶおのが潜りし輪の外に  
糶市の白息右往左往して

ふくろふのふたこ糸づつの縄文語  
さくや比売「記紀」より出て噓する  
一枚に夕日をたたむ刈田かな  
人は歩み鳥は浮寝をしてをりぬ  
日の落ちるとき燃えあがる冬紅葉

柳川 晋

寺田すず江

冷凍の柚子解き放つ散華かな  
ミサイルを踏んで渡つて来る白兔  
どの顔もユダに証文聖夜かな  
ずいと来てどかりと座る師走かな  
歳用意スカボロ市場に行きますか

山の辺の道を辿りて裘  
方頭魚かながしら愚直に生きてをりにけり  
天を衝く裸木のさき気負ひあり  
数へ日を追ひ越してゆく韋駄天  
荒星や遙かに刻の過ぎゆけり

岩下芳子

ずけずけともの言うてくる冬の雷  
石室や冬至の日の出貫通す  
冬晴れの富士を左に右に見て  
抱へ来し五言絶句の屏風かな  
土塊や冬の力を溜めてをり

近藤紀子

乾物をとり出す音冬に入る  
早咲きのつらつら椿巨勢寺跡  
南向く古墳玄室冬日澄む  
モデルルームに初冬の光ほしいまま  
黄落や切り岸に鳴る風の音

岩月優美子

生と死の紙の隔たり寒鼻  
天の鷹大海原を極めたり  
大癒見小癒見山の眠りたる  
梟の声に深まる愁ひかな  
冬帝や星の林に迷ひ込む

竹中一花

大綿の森の匂ひを手に乗する  
町の灯や鍾馗の上に冬北斗  
寒き夜の橋を灯すや鉄輪の灯  
けふうどん明日美山の晦日蕎麦  
大地抱く裸木風に切られをる

前田美恵子

冬帝を虜にしたる弁財天  
湯煙の真つ直ぐに立つ冬至かな  
殊更に寒月雲を寄せつけず  
我儘に生きて筆忠実ちゃんちゃんこ  
裸木となる公園の広さかな

中田禎子

一畳の魔法の絨毯宙に干す  
頭陀袋にあんパン二つ寒詣  
約束の刻過ぎてをりかいつぶり  
枯蓮ジャングルジムの中に鯉  
指切りの海馬いつぱい冬帽子



# 槐市集

中西厚子

飼ひ犬と主の見上ぐ寒の月  
訓練の掛け声響く冬初め  
静寂に耳を欹て年惜しむ  
冬ぬくし心の中にある住みか  
飼ひ猫にダイエットさせるぬくき冬

橋本順子

日のぬくみ穂先に残る枯薄  
白鳥の厚き胸より立ち上がる  
便り来て氷柱まぶしき増しにける  
木枯の音メレンゲに混ぜ込んで  
松手入れ細やかな音続きをり

平野多聞

それぞれに光を浴びて鶴来る  
十七音上下書きかへ注連飾る  
力まずに余生の日々や日記買ふ  
真実は見えぬものなり社会鍋  
仏願のとどきしこの身年歩む

藤田美耶子

山眠る人の世にあるいじめつ子  
北窓を塞ぎひもとく久女の記  
ちぢこまる心抱きて冬眠す  
煤迷の竿伸ばしをり濁り川  
終りあれば始まりのあり冬銀河



安野眞澄

地蔵尊の目深く白き冬帽子  
今年また対の箸買ふ年用意  
寒の夜の門鏽のきしみかな  
除夜の鐘聞きついつしか眠りたり  
元旦の吸物美しき赤漆

三木亨

咳一つ赤穂義士伝佳境入る  
北風ジャングルジムが角に切る  
話尽き湯豆腐をどる四畳半  
人形に恋といふもの近松忌  
第九番年の限りと合唱す

柳橋繁子

昏れてゆく谿の深さや花八つ手  
摩尼車に触れてゆきたる冬帽子  
海峡に立つ白波や冬の虻  
カステラに金箔の犬寒見舞  
鳴る釜と虎屋の羊羹煤ごもり

山田佳子

初恋や白山茶花のちりにける  
寒見舞回覧板に添へてあり  
凍星や父母の住む楽土なる  
飾売り店番の子の欠伸かな  
手鏡の絵馬納めたる恵方道

吉田順子

山行けば冬芽の騒ぐ声のする  
谷深く朴の落葉は日の匂ひ  
寒昂けふ明らかに己が空  
竜の玉言葉しずかにあるべかり  
冬桜けむりのごとく咲き揃ふ

# 槐集

## 高橋将夫選

仏恩の寄せては返す冬の波 大阪 平野 多聞

銃弾に無言の子あり聖樹光

冬すみれそつとポストに入れし恋

火の鳥となりて羽撃く鬼火かな

黄道を辿りて喜寿の大旦那

妄想の世界を記す日記買ふ 大阪 江島 照美

凧や音は心をあやつると

さびしくて輝いてゐる霧水かな

冬の星心の傷の煌めきて

一木に慣れてしまつた冬桜

冬銀河滔滔誰か手を振り来 大阪 有松 洋子

星満ちて十字架のごと滝凍る

畏隠す人の気配に山眠れず

犍陀多カンダタの母は切れない毛糸編む

祀られて水いきいきと寒造

散り敷いて落ち葉思索の道となる 大阪 藤田美耶子

風花に小さき影の生まれけり

ヒットラーの誕生日にも第九かな

大鷹のねらひさだめし姫小松

月光に呼ばれて宙へ観覧車

先駆けて寒梅にある孤高かな 岡崎 吉田 順子

天空の陽を泳がせて紙を漉く

餌ともども小春巻き込む象の鼻

柚子湯して耳のうしろのよく匂ふ

風紋の鱗が光る寒砂丘

かいつぶり発条使ひ切れば浮く 守口 三木 亨

生き様を噛めば海鼠のまた硬し

心底を覗き込むかの冬日差

知る権利どこ吹く風の浮寝鳥

むささびの自己申告の飛型点

# 銀河往来

◆槐集観照

## 高橋将夫

黄道を辿りて喜寿の大旦那 平野 多聞  
元日の朝に黄道を辿るとは、なんとも雄大な精神の風景。黄道は地球を中心に太陽が回る大円。

〈仏恩の寄せては返す冬の波〉の句、まことに仏恩は「寄せては返す冬の波」といえよう。そして、〈銃弾に無言の子あり聖樹光〉の句にある戦禍の子供たちにも、あまねく仏恩と聖樹光がとどくよう祈りたい。

〈火の鳥となりて羽搏く鬼火かな〉の句の「鬼火」から「火の鳥」への飛躍は衝撃的。〈冬すみれそつとポストに入れし恋〉の句、作者にもそんな頃があったのだろう。

妄想の世界を記す日記買ふ 江島 照美  
日記は日々の出来事を書くのが当たり前と思っているが、作者は妄想を書き残すという。せちがらい世の中、せめて日記の中ぐらい思うままに生きたいということだと思ふ。折々の心の風景を残したいということだろう。

〈風や音は心をあやつると〉、〈さびしくて輝いてゐる霧氷かな〉、〈冬の星心の傷の煌めきて〉、〈一木に慣れてしまつた冬桜〉、どの句も豊かな感性で心の風景を描いている。

韃陀多の母は切れない毛糸編む 有松 洋子  
カンダタは「蜘蛛の糸」（芥川龍之介）の主人公で、蜘蛛の糸が切れて、再び地獄に落ちていく姿が目に見え、季語の「毛糸編む」が実に上手く使われている。

〈星満ちて十字架のごと滝凍る〉の句は「滝」の、〈畏隠す人

の気配に山眠れず〉の句は「山」の、〈祀られて水いきいきと寒造の句は「寒造」の本質にこの作者ならではの視点で迫っている。

散り敷いて落葉思索の道となる 藤田美耶子  
確かに落葉の道は思索の道。本質を突いている。

〈月光に呼ばれて宙へ観覧車〉の月と観覧車の描写、〈風花に小さき影の生まれけり〉の繊細な感性、〈大鷹のねらひさだめし姫小松〉の「大鷹」と「姫小松」の取り合せは、いずれもこの作者ならではのもの。〈ヒットラーの誕生日にも第九かな〉の句、ヒットラーが第九を聞いて歓喜する姿は平和への警鐘。年末に歌われるので、無季だが採った。

柚子湯して耳のうしろのよく匂ふ 吉田 順子  
思わず耳の後ろに触れてみた。「柚子湯」が実によく効いていて、この作者の感性がうらやましくなる。

〈先駆けて寒梅にある孤高かな〉は姿のいい立句。  
〈天空の陽を泳がせて紙を漉く〉は「天空の陽を泳がせて」の描写が素晴らしい。〈餌ともども小春巻き込む象の鼻はユーモラスで「小春巻き込む」がいい。

かいつぶり発条使ひ切れば浮く 三木 亨  
鴉がゼンマイ仕掛けの鳥のように描かれているところがまことにユニーク。

〈生き様を噛めば海鼠のまた硬し〉の「生き様」、〈心底を覗き込むかの冬日差〉の「心底」、〈知る権利どこ吹く風の浮寝鳥〉の「知る権利」、〈むささびの自己申告の飛型点〉の「自己申告」、それぞれが核心を捉えた精神の風景。